



Title	ハイラー宗教学再考
Author(s)	宮嶋, 俊一
Citation	北海道大学文学研究院紀要, 168, 37(左)-54(左)
Issue Date	2022-12-09
DOI	10.14943/bfhhs.168.137
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/87492
Type	bulletin (article)
File Information	04_168_Miyajima.pdf



[Instructions for use](#)

ハイラー宗教学再考

宮 嶋 俊 一

Abstract

In this paper, I revisit the Study of Religions by Friedrich Heiler (1892–1967). Heiler was a leading figure in the phenomenological school of religion and, along with Rudolf Otto and Gerardus van der Leeuw, a representative scholar of religions during the Weimar Republic (1918–1933) era. He played an important role in the International Association of the History of Religions (IAHR) after World War II (1939–1945). At the same time, his scholarly achievements were also criticized for being Christocentric and strongly theological in nature.

This paper shows that Heiler’s interest in his major work, *Das Gebet* (1918), was later taken over by the liturgical reforms of the German High Church movement in which he played a leading role, and that for Heiler, the history of religions and his religious movements are linked. Heiler’s creation of the German Mass is a milestone, and *Das Gebet* was its “preface.”

Heiler’s activities stalled during World War II. The IAHR Congress in Rome (1955) tended toward the academic study of the religions of old religious phenomenon, while the Tokyo Conference (1958) and the Marburg Conference (1960), on the other hand, tended to engage with contemporary religions out of a practical concern. Specifically, the “East-West intercourse” was an important theme. This was a continuation of the problematics of the Eranos Congress, which was held before World War II, and in which Heiler also played an important role.

10.14943/bfhhs.168.137

1. はじめに

本稿は、ワイマール共和制期から1960年代まで活躍していたドイツの宗教学者・宗教運動家であったフリードリヒ・ハイラー（Friedrich Heiler, 1892-1967）研究の一端をなすものである。ハイラーに対する従来の評価としては、宗教現象学派の重鎮で、ルドルフ・オットーやファン・デル・レーウらと並びワイマール共和制期を代表する宗教学者であり、戦後はIAHRにおいても重要な役割を果たしてきた、というのが一般的であろう。それと同時に、その学問的成果はキリスト教中心主義的で神学的な色彩を強く帯びていると批判も受けてきた。本稿では、そのような従来の見方を踏まえつつも、より踏み込んだ分析を加えていきたい。

2. ワイマール共和制期の宗教学者としてのハイラー

2.1. 従来の評価

まず、その生涯について簡単に触れておく¹。ハイラーは1892年ドイツ、ミュンヘンで敬虔なカトリックの家庭に生まれた。ミュンヘン大学に学び、1920年以降マールブルク大学神学部で長年活動したが、1934年にグライフスヴァルト大学に異動、また35年から46年まではマールブルク大学の哲学部に所属し哲学部長も務めた。1960年にマールブルク大学を定年退官後は、ミュンヘン大学員外教授を務め、1967年ミュンヘンで没した。

次にハイラーの宗教学者としての業績を振り返る。彼はワイマール共和制期を代表する「宗教学」者、「神学」者、宗教運動家とされる。だが、後述するように宗教学者としてはキリスト教神学的であると批判され、逆に神学者としては、カトリック・福音主義両「正統」神学（ここで言う「正統」とは

¹ ハイラーの生涯と業績に関する記述は、拙著『祈りの現象学』ナカニシヤ出版、2014を参照。

制度的に正規とされる、という意味である)に属していなかった。つまり、ハイラーはデラシネとして、宗教学者になりきれなかった宗教学者、神学者になりきれなかった神学者であり続けたと言える。

宗教学説史的には、ハイラーの代表的著作として『祈り』(*Das Gebet*, 1918)²と『宗教の現象形態と本質』(*Erscheinungsformen und Wesen der Religion*, 1961)³という2つの宗教(現象)学的著作をものしたとされる⁴。1918年、26歳の時に出版された『祈り』は1923年に増補第5版が出版されており、当時、人口に膾炙していたことがわかる。もう一つの宗教学的大著とされる『宗教の現象形態と本質』は1961年、69歳の時に出版されている。こうしたことから、ハイラーは息の長い学者であったと言えるが、それに加えて「宗教学的」とされる大著が青年期と晩年に出版されているという点も特徴的であろう。

では、両著作の間の活動はどのようなものであったのか。まず、1920年代の活動としては、ローマ・カトリック教会(とりわけイエズス会士たち)との論争が挙げられる。また(本稿では詳細に触れることはできないが)インド人宣教師スンダー・シングをめぐる論争にもエネルギーを注いでいた。前者の活動とのつながりと言うと、既存の教会制度を越えた活動として、後述する「ドイツ高教会運動」で(創始者ではないが、そうであると誤解されるほど熱心に)指導的役割を果たしてきた。1920年代における執筆活動の基盤はこのドイツ高教会運動が発行していた雑誌(“Hochkirche”, 後年に“Eine heilige Kirche”とタイトルが変更された)である。

第二次世界大戦前後は後述するように活動が大幅に制約された。所属に関して言えば、グライフスヴァルトへの異動や戦後の哲学部への所属の変更は、

² Heiler, Friedrich, *Das Gebet. Eine religionsgeschichtliche und religionspsychologische Untersuchung*, Reinhardt, München 1918 (5. Aufl. 1923).

³ Id., *Erscheinungsformen und Wesen der Religion*, W. Kohlhammer, Stuttgart 1961.

⁴ そうした見方は、例えば Bleeker, Claas Jouco, Die Bedeutung der religionsgeschichtlichen und religionsphänomenologischen Forschung Friedilch Heilers. *Numen*, XXV, 1978, S. 2-16.に示されている。

本人の意志に反した「左遷」であるとされている。

戦後は、IAHRなどで活躍、1958年の東京大会、1960年のマールブルク大会では重責を果たした。また、宗教学の実践的役割（諸宗教の協調・協働）を強調し、そうしたテーマでの論考を多く発表している。

そして晩年（から死後）において、ハイラーが棹さしていた宗教現象学はクルト・ルドルフらによって（後述するように）厳しい批判にさらされることとなる。

2.2. 従来ワイマール共和制期ドイツ宗教学の理解

次に、ハイラーの宗教学的な業績を当時の時代状況の中に位置づけていこう。従来ワイマール共和制期ドイツ宗教学の理解は、以下のようなものとなる。すなわち、1917年ルドルフ・オットーの『聖なるもの』が、また1918年ハイラーの『祈り』が出版され、さらに1920年にはマールブルク大学福音主義神学部に比較宗教史の講座が設置され、ハイラーが助教授として着任した。そうした動きから、この時期を宗教学の発展的形成期と捉えるような見方が一般的である。さらに、宗教現象学研究の立場からは、オットー、ハイラー、いずれもが（キリスト教以外の）諸宗教の存在を肯定的に認めつつ、（可視的な）諸宗教現象の背後に宗教の本質（核）と呼びうる何かが存在するとして、その本質を明らかにすることを課題としており、そうした意味では1910年代の終わりから20年代にかけて、宗教現象学的な比較宗教学が制度的にも実質的にも形成されつつあった、という見方が示されてきた。

しかし、オットーは福音主義組織神学者であり、自らもそのことを自覚していた。そして、彼が向き合っていたのは、自由主義的な福音主義の影響力が弱まりつつある中、当時台頭しつつあった弁証法神学の動きである。ちなみに、1921年にはルドルフ・ブルトマンがマールブルク大学神学部で新約聖書学の正教授に就任している。

オットーに対し、ハイラーはカトリック出自であり、若き日はカトリックの聖職者になることを夢見ていた。当時のローマ・カトリック教会の教皇中心主義的な動きに反発する聖職者・神学者たちが近代主義者（モダニスト）

として公的領域から排除されていく中で、ハイラーが向き合っていたのはローマ・カトリック教会（とりわけイエズス会士たち）であった⁵。

つまり、同じマルブルク大学の福音主義神学部に所属し、宗教学の発展的形成期を担っていたとされつつも、2人は異なる「敵」に向き合っていたのである。もちろん、ハイラーがオットーと敵対していたということではなく、少なくともハイラーはオットーの学説を肯定的に継承している。ただ、共有すべきものは共有しつつも、「見ている方向が違っていた」ということである。

それにしても、なぜこの2人が「セット」と考えられていたのかと言えば、ナタン・ゼーデルブロムの存在が大きい。すなわち、ゼーデルブロムが両者の橋渡し役を果たしたのである⁶。ハイラーが聖職者への夢を諦め宗教学へと「転向」した背景にはゼーデルブロムの影響が大きく、それと同時にオットーとも親交のあったゼーデルブロムが2人の間に入ることで形成されたトリアーナが宗教現象学形成のメルクマルとされてきたのである。

このようなワイマル共和制期ドイツ宗教学に対する評価が、戦後形成されていく。かつてG.メンシングはこの時代の宗教学の傾向を「理解の宗教学」と呼んだ⁷が、その多くが宗教学者であると同時に宗教運動家でもあった点に関して、R.フラッシュェは彼らを「預言者症候群」と批判した⁸。また既述の通り、彼らのキリスト教神学的姿勢をK.ルードルフは「偽装神学」と呼

⁵ Heiler, Friedrich, *Im Ringen um die Kirche (Gesammelte Aufsätze und Vorträge, Band 2)*, Reinhardt, München 1931などを参照。

⁶ Misner, Paul (Hrsg.), *Friedrich von Hügel — Nathan Söderblom — Friedrich Heiler: Briefwechsel 1909-1931*, Bonifatius, Paderborn, 1981などを参照。

⁷ Mensching, Gustav, *Gesichte der Religionswissenschaft*, Universitätsverlag, Bonn 1948 (下宮守之訳『宗教学史』創造社, 1970)

⁸ Flasche, Reiner, *Religionsmodelle und Erkenntnisprinzipien der Religionswissenschaft in der Weimarer Zeit*. Cancik, Hubert (Hrsg.), *Religions- und Geistesgeschichte der Weimarer Republik*, Patmos, Düsseldorf 1982, S. 261-276 (「ヴァイマル時代の宗教学における宗教のモデルと認識原理」フーベルト・カンツィク編, 池田昭・浅野洋監訳『ヴァイマル共和国の宗教史と精神史』御茶ノ水書房, 1993, 379-380頁)

び批判した⁹。

だが、こうした批判はキリスト教神学に対抗しつつ宗教学の自律性・自立性を確立するという彼らの目的ゆえのことであったとも言える。ルードルフはハイラーらの活動を「偽装神学」と呼び、そのキリスト教神学的傾向を批判したのだが、一旦は『祈り』や『宗教の現象形態と本質』をハイラーの「宗教学」の代表著作とし、その上でそれらを「キリスト教神学的」と批判するということは、自らがキリスト教神学と対峙しつつ、宗教学の自律性・自立性を説いた「宗教学」者が、そうした批判により自らの学問的アイデンティティを確保しようとしたためだと言うこともできるだろう¹⁰。また、学説史的にというだけではなく、マールブルク大学福音主義神学部の内部に存在していた宗教史学科の自律・自立（人事権など）を確立するために必要な態度でもあったのである。

しかし、そうした見方、つまり既述の二著作を「宗教学」者ハイラーの代表的著作とする一方、そうしたハイラーの宗教学的成果を「神学」的であると批判するような見方は、一面的なハイラー理解である。両著作の間の期間に何が行われていたのか、それを確認することが必要である。キリスト教神学を対抗軸とした記述的・客観的な宗教学の確立というスローガンを掲げることが困難となった現在、そうした批判のみならず、学問史的な観点からその生成プロセスを辿る作業が必要である。本稿はそうした視点からハイラーの宗教学と宗教活動についてさらに検討を進めていく。

⁹ Rudolph, Kurt. *Das Problem der Autonomie und Integrität der Religionswissenschaft. Nederlands Theologisch Tijdschrift* 27, 1973, pp. 105-131.

¹⁰ 拙稿「宗教現象学批判とその後」『宗教研究』第91巻別冊, 2018, 173-174頁。

3. ハイラーの宗教学

3.1. 戦前の活動から

3.1.1. 『カトリシズムの本質』への反応から

1919年、ハイラーはゼーデルブロムの招きでスウェーデンを訪問、そこで行われた講演をまとめて出版したのが『カトリシズムの本質』（以下『本質』と略記）¹¹である。このスウェーデン訪問では、ハイラーがゼーデルブロムの執り行った聖餐式に参加し、それをもってハイラーは福音主義へと「改宗」したとされる。以下で、この講演集とそれに対する反響、さらにその反響に対するハイラーの応答を確認していく。

『本質』の4年後に出版された『カトリシズム』（1923）¹²という著作の冒頭には『本質』に寄せられた反響（書評、論評からの引用）がまとめられており、『カトリシズム』が『本質』への応答として書かれたことが説明されている¹³。『本質』に収められた講演では、「福音主義的カトリック性(Evangelische Katholizität)」というエキュメニカルなキリスト教の理念が語られるのだが、これはカトリシズムの宗教性・精神性を評価しつつもローマ・カトリック教会の教会制度を批判し、その面で福音主義の「自由さ」を評価するという内容であった。ハイラーは、『カトリシズム』の冒頭で、『本質』に言及した書評・論評の類いを数多く集め、それらの書き手をカトリック側、福音主義側、俗人の立場などに分類、その受け止めを整理・分析し、（その詳細は省くが）以下のように結論づける。すなわち、「ハイラーは（福音主義に改宗したと言いながら）未だカトリックへの郷愁から逃れておらず、その理解は一面的であり、よってカトリックと福音主義の乖離を乗り越えるものではない」とい

¹¹ Heiler, Friedrich, *Das Wesen des Katholizismus.: sechs Vorträge, gehalten im Herbst 1919 in Schweden*. Reinhardt, München 1920.

¹² Id., *Der Katholizismus. Seine Idee und seine Erscheinung*, Reinhardt, München 1923.

¹³ ハイラーのアルヒーフには新聞・雑誌からの「切り抜き」が保存されているが、その中には自著への書評・論評が数多く含まれている。

う厳しいものであった、というのがそのまとめである¹⁴。

自らの著作に関する書評を収集、分類・整理し、分析するといった作業は、『祈り』に関しては行われていない。つまり『祈り』に寄せられた反応に基づいた新たな祈り論を公表することはなかったと言ってよい。その意味で、『本質』の作業を『カトリシズム』へと継続・発展させている点は注目に値する。では、『祈り』にはそうした継続・発展作業は本当に存在していなかったのだろうか。

この点に関し、『祈り』の祈り論はその後「研究」へと展開したのではなく、むしろ実践活動へと進展していったのではないか、というのが著者の見立てである。つまり、ハイラーの祈りへの関心は継続していたが、それは研究としてではなく礼拝・典礼改革と新たな礼拝・典礼創造へと向かっていったのであり、そのための場がドイツ高教会教会運動であった。またそれは、『本質』への批判に対する実践的な応答でもあった（理論的な応答が『カトリシズム』という著作の出版であった）。つまり、「福音主義的カトリック性 (Evangelische Katholizität)」は新たな礼拝・典礼によって（すべてではないとしても、その一部が）実現したということである¹⁵。

このように考えてみることで、ハイラーの活動に一貫性を見いだすことが可能である。つまり、「宗教学的」著作と「神学的」著作、あるいは「宗教学的」活動と「宗教」運動は、ハイラーの中では地続きであったのであり、この姿勢は IAHR へのコミットにも現れてくるのである（後述）。

3.1.2. ドイツ高教会運動と「ハイラー・ミサ」の作成

ハイラー個人の宗教的葛藤（カトリシズムから福音主義への改宗）、および『祈り』という著作による成果、さらには『本質』への批判への応答、それらが結びつく形で、1920年代にハイラーの宗教的実践活動が展開していく。具

¹⁴ Heiler, Friedrich, op. cit., S. 1-14.

¹⁵ 拙稿「ワイマール共和制期ドイツの宗教学と宗教運動」『宗教研究』第95巻別冊, 2022, 98頁。

体的に言えば、ハイラーは自らが深く関わったドイツ高教会運動¹⁶において、独自のミサを作成することとなる。この礼拝・典礼の式次第は、福音主義の礼拝にカトリック的な要素を含めたものである。

ここでドイツ高教会運動について簡単に説明を加えておく。「高教会 (Hochkirche/High Church)」という用語は、18世紀初頭の英国で生まれたものであり、宗教改革の時代から英国国教会の中に存在する福音主義的な教会の特質を指す。この教会性は、神学的・教会学的にピューリタニズムやローマ・カトリシズムとは区別される。高教会派はローマ・カトリック教会から独立したアングリカニズムを提唱する一方、司教団の体制と聖餐式に関する保守的な教義は守ろうとし、その動きは19世紀にオックスフォード運動という形で大きな影響力を持つようになった。

3.1.3. ドイツ高教会運動

イギリスの高教会運動と並んで、20世紀ドイツ・ルター派でも同様の動きが生じた。きっかけは、シュレスヴィヒ・ホルシュタイン州の牧師、ハインリッヒ・ハンセン (Heinrich Hansen, 1861-1940) が、1917年に発表した論文「Stimuli et Clavi (Spieß und Nägel)」(槍と釘)である。この論文の中で、ハンセンは自分が関わっていた領邦教会を批判し、「悔い改めて、福音によって定められたカトリック性に戻るように」と呼びかけた¹⁷。ハンセンは、1918年に「高教会同盟 (Hochkirchliche Vereinigung)」を創設する。

この運動の目的は継承性(教義や告解、典礼や教会組織の面で初代教会との時代を超えたつながりを重視)、エキュメニズム(国教会やローマ教会など、特定のキリスト教宗宗教共同体に限定されることのない、唯一の聖なる普遍的なキリスト教会を意識し、東西の分裂を克服することを目指す)、実在性(高

¹⁶ Langfeldt, Jan, *Die hochkirchliche Bewegung in Deutschland und die Eucharistiefeyer der Evangelisch-katholischen Eucharistischen Gemeinschaft von 1931*, Grin Publishing, 2007.

¹⁷ Hansen, Heinrich, Stimuli et Clavi - Spieß und Nägel. *Virzig Jahre Hochkirchliche Bewegung in Deutschland und in Nachbarländern. Sonderheft der Zeitschrift "Eine heilige Kirche" II*, 1957/58, 126f.

教会の想定する教会性は実在する教会として顕れる)の3つをスローガンとし、それらが「カトリック性」としてまとめられている。その活動は福音主義教会のカトリック化を目指し、具体的には、完全な聖体拝領の再導入、聖務日課、聖人崇拜、告解制度などの要求を掲げた。

ただし、運動はこのような制度的枠組みを要求しながらも、現実的には特定の宗教共同体の創設を目指してはおらず、あくまでこうした理想を追求する人々の集まりであった。

この運動で重要であったのが礼拝・典礼改革である。すなわち、福音主義教会においてカトリック的な特質をも備えた礼拝・典礼を創設することが重要な課題となっており、その課題に応えようとしたのが、いわゆる「ハイラー・ミサ」と呼ばれるものであった。ハイラーは、1929年「高教會的聖ヨハネ兄弟団」(福音主義-カトリック的聖体拝領共同体)を設立、そして1931年に「福音主義-カトリック的聖体拝領共同体の聖体拝領式次第」、いわゆる「ハイラー・ミサ」が公表された¹⁸。

そのポイントを指摘しておく、「エキュメニカルな礼拝」を目指すため、福音主義で消滅してしまった(聖体拝領など)秘蹟の儀式(それ自身はルターにも存在していたとされる)の神秘を取り戻すと共に、福音主義的な方法、すなわち信徒の母語を用いたり(ドイツ語によるミサ)、会衆の関与を大きくしたり、福音主義の賛美歌を用いたりする、といった特徴を有していた。その成果は『祈り』の分析や『カトリシズムの本質』で示された「福音主義的カトリック性」といった思想が流れ込み、昇華されていった成果と見なすこともできる¹⁹。

¹⁸ Heiler, Friedrich, Eucharistiefeier der Evangelisch-katholischen Eucharistischen Gemeinschaft, *Hochkirche* 13, 1931, S. 145-162.

¹⁹ 1960年、IAHR マールブルク大会において、ハイラーは大会参加者(研究者)にミサへの参加を呼びかけた。そのミサは、ハイラー自身が構想したものであった(この呼びかけは、研究者たちにとって不評であった。IAHR大会は学術大会であり、宗教者の集まりではない。だが、おそらくハイラーにとって、両者の区別はあまりなかったのではなかろうか)。

3.1.4. 戦前の活動のまとめ

ここまで『祈り』という著作を（後年の人々が言うところの）宗教学的著作（ただし、キリスト教神学的な色彩を強く帯びている）と捉えるのではなく、ハイラーが深く関与した高教会運動における礼拝・典礼改革やその宗教思想である「福音主義的カトリック性」と関連付けつつ、礼拝・典礼改革のいわば「序章」として同書を位置づける可能性を示唆した。後年の研究者がハイラーの諸著作を「宗教学的」「神学的」と分類してきたのは、神学と対置される「宗教学」を（両者の関係において）前提してきたからと考えられるが、ハイラーの活動を全体として捉えていくと、そうした区別はハイラー自身の意図とは異なっている。『祈り』という著作もドイツ高教会運動における活動も、理想とする「祈り」の追求という意味では一貫しているのだ。そして、その活動は戦後の活動へと継承されていくのである。

3.2. 戦中から戦後へ

3.2.1. 戦前・戦中・戦後まもなくの活動休止期

1940年に、雑誌“Hochkirche”が発禁処分を受ける。これは同誌がナチス政権に対して批判的な記事を掲載した、などの理由ではなく、ハイラー自身の国際的な交友関係が原因とされる（ロシアのギリシア正教関係者やイギリスの英国国教会関係者との関わりなどが問題視された）。

1941年には、著作として『古代教会と教皇中心主義』²⁰が出版されたのみで、雑誌記事なども含めて、これ以外の出版物は一切ない。さらに1942年から1946年にかけて、ハイラーが執筆し、出版された文書は皆無である。戦中の活動がきわめて制限されていたことが、そのことからわかるだろう。

では、戦後の活動はいつから再開されたのであろうか。1947年には『カトリック近代主義の父 アルフレッド・ロアジー』²¹一冊が出版されたのみで、

²⁰ Heiler, Friedrich, *Die katholische Kirche des Ostens und Westens, II, 1: Altkirche Autonomie und päpster Zentralismus*. Ernst Reinhardt, München, 1941.

²¹ Id., *Der Vater des katholischen Modernismus - Alfred Loisy (1857-1940)*. Ernst-Reinhardt-Buecherreihe. Erasmus-Verlag, München 1947.

雑誌記事なども含めて、これ以外の出版物は一切ない。この書籍は「カトリック近代主義の父」とされるアルフレッド・ロアジーの伝記・解説であるが、戦前、雑誌“Eine heilige Kirche”に掲載された文章を増補したものである。戦後数年は、彼の活動が停滞していたことがわかるが、そうであっても（正確な執筆時期は不明だが）戦後真っ先に出版されたのがカトリック近代主義に関わる書籍であることから、キリスト教教会のあり方に対する関心が戦前から戦後にかけて一貫していることがわかる。

1948年には高教会運動発行の機関誌が復刊、活動が再開される。1949年には説教集『ミステリウム・カリタス』²²が出版される。これは1943年から48年にかけて、マールブルクの教会・礼拝堂で行われた説教を集めたものであり、活動休止期とみなしうる期間においても、教会での活動は（細々と）続けられていたことがわかる。さらに49年以降になると、戦前と同様、あるいはそれ以上に活発な執筆活動が行われるようになる。

3.2.2. IAHR とハイラー

ここまで、戦中から戦後にかけてのハイラーの活動（正確には、活動が休止した状況）を確認してきた。一方、IAHRの活動に関して言うと、1950年、戦後初のアムステルダム大会が開催された。だがこの大会についてハイラーが執筆した文章は、存在していない。ハイラーに関わるのは、1955年ローマ大会以降であり、さらに1958年東京大会、および1960年のマールブルクでは重要な役割を果たすこととなる。以下でハイラーが記したローマ大会と東京大会の報告を確認しよう。

3.2.3. 1955年IAHRローマ大会報告²³

こちらは、やや長めの報告である。ただしその内容の大部分は論評・批評

²² Heiler, Friedrich, *Mysterium Caritatis. Predigten fuer das Kirchenjahr*. Ernst-Reinhardt-Buecherreihe. J. & S. Federmann-Verlag, München 1949.

²³ VIII. Internationaler Kongress für Religionsgeschichte in Rom, 17. -23. 4. 1955, *ThLZ* 80, 1955, S. 683-696.

が含まれておらず、文字通りの「報告」となっており、学会の各部会で誰がどのような報告を行ったか、といった記録的な記述が中心である。

冒頭部分には以下のような内容が記されている。まず、IAHRの歴史についてである。19世紀後半における宗教史の興隆は、宗教史学の雑誌の創設と国際会議の開催につながった。最初の会議は1900年にパリで開催された。さらにバーゼル(1904)、オックスフォード(1908)、ライデン(1912)、ルンド(1920)、ブリュッセル(1935)、アムステルダム(1950)と続き、第8回IASHR国際会議は、1958年4月17日から23日までローマで開催された。ローマはそのような会議を開くのに最適だった。なぜなら、古代ローマとオリエント祭儀との出会い、ならびにその始まりから現在に至るまでのキリスト教の発展の両方において、西洋宗教史の大部分がそこにはっきりと現れているからだ。現会長はイタリア人で、ローマの国立大学の宗教史学講座の名誉教授であるラッファエーレ・ペッタッツォーニだが、当初、このような会議のために必要な国家の支援を獲得することは、簡単ではないように思えた。当然のことながら、影響力を持つ教会の取り巻きは、教皇の前で、宗教問題に関して、教派的に中立的な学会を歓迎しなかった。ペッタッツォーニは困難を克服し、イタリア当局に会議を推進し参加するよう説得したが、哲学、天文学、婦人科などローマで開かれた他の国際学会の場合のように、教皇によって会議参加者が受け入れられることはなかった。

この後、ペッタッツォーニによる基調講演の紹介、学会参加者の内訳や、各部会の発表者などの報告(論評抜き)、およびドイツ支部の活動報告が続く。

ペッタッツォーニの基調講演では、「本学会は純粋に学問的・非教派的な性格を持つ。それゆえ、参加者は様々な宗教・教会に属しているか、いずれにも所属していない。だが、みな個々の信仰は異なるものも、宗教(die Religion)というものが学問的施策の対象でありうるし、またそうでなければならぬという点については、信仰(Glaube)を共有している」と指摘があり、さらに宗教(die Religion)とはいかなるものかについての説明が続く(宗教の本来の目的は人類の救済にある、など)。そして、宗教概念を拡張することの必要性を主張し、宗教史の学会を「リベラリズムの大いなる実験」

とする。

IAHR 大会が「ローマ」で開催されたことの意義は（ローマ・カトリック教会と対立しながらもカトリックへの「郷愁」を絶ちがたかった）ハイラーにとって大きかったはずである。ハイラーの認識によれば、ローマ大会は（その土地柄から）西洋宗教の研究が課題とされ、それは学問的な性格を持つものであった。また、ベッツォーニの基調講演紹介において、ハイラーの関心と重なるであろう指摘は、宗教学者が「宗教」(die Religion) への信仰を共有している、という点である。

3.2.4. 1958 年 IAHR 東京大会報告²⁴

引き続き、IAHR 東京大会報告の内容を紹介しよう。この報告は、マールブルクの地元紙“Oberhessische Presse”に掲載されたものだ。つまり、専門家向けではなく、一般市民向けの文章である。そのタイトルに記されているように、東京大会についてだけでなく、その前に開催されたローマ大会についての記述もあり、両者を対比的に紹介する内容が含まれている。例えば、次のような紹介である。「1955 年 4 月、世界中から多くの学者がローマに集まり、人類の宗教に関して、熟慮を重ねた末の研究成果を交換した。フォーカスされたのは神聖な王権という現象であった。それは過去の宗教にとって最も重要であったが、現在ではわずかな残骸しか見出せない。ローマとその周辺にある数多くの宗教的モニュメントもまた過去を指し示している。ローマ大会とは対照的に、今年の東京での『宗教史国際会議』は、はるかに現代的で実生活に関連したものであり、その主なトピックは、東洋と西洋の宗教の歴史的関係であった」。この部分ではローマ大会から東京大会にかけて、「学問と宗教」という対立軸において前者から後者に比重が移った、という認識が示されている。続く部分では日本の研究者の紹介（日本には宗教哲学者が多い、など）、大会の様子などの報告がなされる。学術大会に関してだけな

²⁴ Rom-Tokio-Marburg. Drei internationale Kongress für Religionsgeschichte', *Oberhessische Presse*, 11. 10. 1958.

く、ユネスコ主催のシンポジウムにも言及がある。すなわち、「純粋に学問的なプレゼンテーションと議論に引き続き、ユネスコ保護下での「シンポジウム」が開催され、現在の東西世界間の交流が、個別に、また全体として扱われた。この記事の著者（ハイラー）は東洋の宗教が西洋の知的世界に与える影響について語った。このようにして、歴史的研究は人々と宗教の間の相互理解に即効性を持って役立つこととなった」。こうした記述からもわかる通り、ハイラーは自らの学問的活動が実践的な役割を果たしていることを自覚していた。それゆえ、東京大会における宗教学の「実践性」（東西交流）をハイラーは評価し、その後、そうした傾向はマールブルク大会へと継承されていくこととなる。ちなみに「東西の出会い」はかつてハイラーが参加していたエラノス会議でのテーマでもあった。そして、この報告はマールブルク地元民へのマールブルク大会協力のお願いで終わっている。これは、掲載されたのが、地元紙であるが故だろう²⁵。

3.2.5. 諸宗教の協働などに関わる論文

今回は、紙幅の都合上十分には扱えないが、戦後になって増えるのが、諸宗教の協働に関する論文である。例えば、以下のようなものがある。

-Um die Zusammenarbeit der Christenheit mit den ausserchristlichen Religionsgemeinschaften. In: *Schweizerlische Theologische Umschau* 22 (1952) S. 1-11.

-“Mut zur Liebe”- Die Zusammenarbeit der Religionen im Dienste der ganzen Menschheit. *EhK27/I* (1953/54) S. 18-33.

-How can Christian and Non-Christian Religions co-operate?: In: *The Hibbert Journal* LII (1954) pp. 3-14.

-Von der Einheit der Religionen. Die Zusammenarbeit der Christenheit mit

²⁵ ただし、ハイラー自身は、IAHR大会を学術大会としてだけでなく、「万国宗教者会議」的なイベントとして捉えていたとも考えられる（地元紙による報道の様子などからも、それが窺える）。そしてその点について、後に「宗教の相互理解は宗教学の課題ではない」という批判が生じる。

den ausserchristlichen Religionsgemeinschaften als religioese Aufgabe. In: *Bulletin der Indischen Botschaft*, Bonn (1954) Nr. 12, S. 1-10.

-Um die Zusammenarbeit der Christenheit mit den ausserchristlichen Religionsgemeinschaften. In: *Mitteilungen des Instituts für Auslandsbeziehungen* 5. Bonn (1955) Heft1/2 Jan./Feb.

-Ein Weltbund der Religionen. In: *Freies Christentum* 1957, Nr. 11, S. 139ff.

-Unity and Collaboration of Religions. In: *News Digest of the International Association for Liberal Christianity and Religious Freedom* No. 35, Autumn 1957, pp. 4-7.

3.2.6. IAHR 報告と戦後の活動に関するまとめ

ローマ、東京、マールブルクという戦後 IAHR の「流れ」にハイラーは関わっていた。その「流れ」とは、大きく言うと学術的大会から実践的活動へというものである。ただしそれは、研究発表そのものが実践的になっていったというよりも、研究活動に加えられた実践的活動をハイラーが評価し、むしろそこに IAHR の意義を見いだしていったということであろう。

4. まとめ

本稿で論じたことをまとめていく。ハイラーの宗教運動家としての側面に注目すれば、とりわけ礼拝・典礼改革への関心という点で戦前の活動には(『祈り』の出版とそれ以降の活動において)一貫性が見られる。また、そうした実践的関心は戦後の IAHR マールブルク大会まで継承されていると考えられる。とりわけ、戦後の IAHR へのコミットを通じて、ハイラーは東西交流という実践的課題へと向かっていった。

もちろん、戦前の活動と戦後の活動には違いも存在する。戦前の問題関心が主にキリスト教「内部」における問題であったのに対して、戦後はその活動がキリスト教のみならず、世界の諸宗教へと開かれていった、と見ることも可能であろう。その意味で、IAHR の東京大会やマールブルク大会におけ

る東西交流への関心は注目に値する。この東西交流に関わった個々の研究者・宗教者の人間関係までは調べ切れていないが、IAHRを学術団体としてではなく、実践的な活動の場と捉えていたことは推測可能である。その点に関して、本稿では十分に論証し切れていないため、今後の課題としていきたい。

本研究はJSPS科研費21K00064, 20H01188, 20K20499の助成を受けたものである。

参考文献

- Bleeker, Claas Jouco, Die Bedeutung der religionsgeschichtlichen und religionspänomenologischen Forschung Friedilich Heilers. *Numen*, XXV, 1978, S. 2-16.
- Flasche, Reiner, Religionsmodelle und Erkenntnisprinzipien der Religionswissenschaft in der Weimarer Zeit. Cancik, Hubert (Hrsg.), *Religions- und Geistesgeschichte der Weimarer Republik*, Patmos, Düsseldorf 1982, S. 261-276 (「ヴァイマル時代の宗教学における宗教のモデルと認識原理」フーベルト・カンツイク編, 池田昭・浅野洋監訳『ヴァイマル共和国の宗教史と精神史』御茶ノ水書房, 1993, 379-380頁)
- Heiler, Friedrich, *Das Gebet. Eine religionsgeschichtliche und religionspsychologische Untersuchung*, Reinhardt, München 1918 (5. Aufl. 1923).
- *Der Katholizismus. Seine Idee und seine Erscheinung*, Reinhardt, München 1923, S. 1-14.
- , *Das Wesen des Katholizismus.: sechs Vorträge, gehalten im Herbst 1919 in Schweden*. Reinhardt, München 1920.
- , *Der Katholizismus. Seine Idee und seine Erscheinung*, Reinhardt, München 1923.
- , *Im Ringen um die Kirche (Gesammelte Aufsätze und Vorträge, Band 2)*, Reinhardt, München 1931.
- , Eucharistiefeier der Evangelisch-katholischen Eucharistischen Gemeinschaft, *Hochkirche* 13, 1931, S. 145-162.
- , *Die katholische Kirche des Ostens und Westens, II, 1: Altkirche Autonomie und päpster Zentralismus*. Reinhardt, München, 1941.
- , *Der Vater des katholischen Modernismus - Arfred Loisy (1857-1940)*. Ernst-Reinhardt-Buecherreihe. Erasmus-Verlag, München 1947.
- , *Mysterium Caritatis. Predigten fuer das Kirchenjahr*. Ernst-Reinhardt-Buecherreihe. J. & S. Federmann-Verlag, Muenchen 1949.

- , VIII. Internationaler Kongress für Religionsgeschichte in Rom, 17. -23. 4. 1955, *ThLZ* 80, 1955, S. 683-696.
- , Rom-Tokio-Marburg. Drei internationale Kongress für Religionsgeschichte', *Oberhessische Presse*, 11. 10. 1958.
- , *Erscheinungsformen und Wesen der Religion*, W. Kohlhammer, Stuttgart 1961.
- Langfeldt, Jan, *Die hochkirchliche Bewegung in Deutschland und die Eucharistiefeyer der Evangelisch-katholischen Eucharistischen Gemeinschaft von 1931*, Grin Publishing, München, 2007.
- Mensching, Gustav, *Gesichte der Religionswissenschaft*, Universitätsverlag, Bonn 1948 (下宮守之訳『宗教学史』創造社, 1970)
- Misner, Paul (Hrsg.), *Friedrich von Hügel — Nathan Söderblom — Friedrich Heiler: Briefwechsel 1909-1931*, Bouifatius, Paderborn, 1981
- Rudolph, Kurt. Das Problem der Autonomie und Integrität der Religionswissenschaft. *Nederlands Theologisch Tijdschrift* 27, 1973, pp. 105-131.
- 宮嶋俊一『祈りの現象学』ナカニシヤ出版, 2014
- 「宗教現象学批判とその後」『宗教研究』第91巻別冊, 2018, 173-174頁。
- 「ワイマール共和制期ドイツの宗教学と宗教運動」『宗教研究』第95巻別冊, 2022, 98頁。